白石市文化財調査報告書第３６集

郡山横穴古墳群調査概報

平成２１年８月

白石市教育委員会

郡山横穴古墳群調査概報

はしがき

白石市郡山地区は白石盆地の東北方にある。山地一帯は白色凝灰岩質の地域で、現在、白岩を建築用材として伐出している。古くは、この岩層を利用して各所に数個或は数十個の横穴をうがって墳墓としていた。

現在、この地区内に横穴古墳凡そ４群を数えることが出来る。

第１群は斉川下流沖積平野地縁端が山地に移行する所に凝灰岩を露呈した断崖壁に数段にわたって造成され、古くからエゾ穴として知られているエゾ穴古墳群、６２個。

第２群は同所より東方凡そ 100 m程、吉野喜平氏宅裏の竹藪内の「寺入西」群４個。

第３群はその峯の中段、石伐場境の上にある「寺入東」群１８個。

第４群は金倉部落東方沿いに上って北岸の露岩崖下の「金倉入」群１０個、旧称一ツ穴。計９４個である。

伝承

古くから「エゾ穴」と呼ばれて有名であった。昔、エゾが住んでいた穴だと伝えられている。近くは此穴を利用して乞食が住んだり、ばくち打ちの連中が利用したり、附近の人々が倉庫代りに使用したりしているので形も崩れたものもあり、浮浪者に利用されぬよう埋められたものもある。

文献

仙台藩儒員佐久間洞巖が享保４年（１７０７年）に著した「奥羽観跡聞老志」には記載がない。

同田辺希文が明和９年（１７７２年）の「封内風土記」（２５巻）には「洞穴五十二有り、土人之を呼んで蝦夷穴と云う。上古蝦夷の居所なり」と記す。

安永６年、仙台藩の命によって書上げた郡山村「風土記御用書出」の中には「一旧蹟、一、穴口洞。六拾四。右者蝦夷穴と申伝置候事」とある。

刈田郡誌（昭和３年）には『蝦夷穴』白石町字郡山に蝦夷穴と称するものあり。封内風土記曰く「洞穴五十二有り、土人之を呼んで蝦夷穴と云ふ。上右蝦夷の居所なり」と。識者、此の蝦夷穴は蝦夷の住居に非ずして、其の宝器を蔵せる穴ならんと。其の何れなるによるも、蝦夷に関係ある遺跡なるを知る」とある。

昭和５年発行改造社日本地理大系第５巻奥羽編には遺跡の写真を示し、左（下）の説明文がある。

「白石町郡山の蝦夷穴　宮城県白石町の内、大字郡山金倉山にある。大小二十余開口しているが、もとは更に夥しい数であったといわれる。里俗之を蝦夷横穴と呼び、上古蝦夷の穴居した址と伝えているが、是が上代の墳墓たる所謂横穴であることはいうまでもない。地名郡山はこの附近が古への郡家の所在地であったことを示して居り、文化も早く開け、人口も相当稠密であったと思われ、上代遺跡の多く存ずるのは偶然ではない。(山本桝蔵)」

昭和８年５月１０日、１１日、考古学者文学博士鳥居龍蔵氏が視察され、其日の白石町公会堂に於ける公開講演会席上「蝦夷の住居ではなく我大和民族の墳墓である」と講演してエゾ住居説を否定し、古墳説を発表、地方民の上代史観を啓蒙する所があった。

昭和９年頃、白石中学校長相原賢蔵氏は不忘新聞紙上に「まだ手つかずの穴が多数ある。

エゾ穴以上の群集墳を山地内に発見した」と報じてあるが、位置不明であり疑問とされていた。

昭和２２年４月、白石高等学校郷土研究斑が第３群一ツ穴を調査している。

昭和２９年１０月、白石市博物館建設準備委員会調査により、佐藤庄吉、高子直衛、遠藤忠雄、３氏が市内考古遺跡の実地踏査を行い、「白石地区内古墳横穴調査報告書」をまとめた。

昭和３７年より３８年にかけて、宮城県教育委員会委嘱により片倉信光は佐藤庄吉と共に埋蔵文化財包蔵地カード作製のため調査を行った。

本報告書は以上の調査記録を基礎として記すものである。

各説

第１群エゾ穴横穴古墳群

郡山字穴口山、穴前６３、高子武氏所有地にある。東北本線白石駅を発して北行、郡山踏切通過後、進行方向右手車側車窓からも望見できる。凝灰岩が斎川によって浸されてできた露出岩崖に数段にわたって造成されている。崖の前面は畑地、さらに田があって斎川を越しで白石盆地が小原山麓迄、一望のうちに展開している。北風をさえぎり、陽光を受ける場所である。

封内風土記は５２、風土記書上は６４を数えているが、現在埋められたり、竹藪中に埋没したりして不明のもあり、６３個を調査することが出来た。

外観、不規則なビルの窓を見るように開口している。西部は明かに形を現わしているだけ、後人の破壊変形を受け、原形其侭のものは、ほとんどまれである。東部は崖が急で容易に登ることも出来ず、比較的原形に近い姿を留めているよう見受けられる。

後人の変形には入口玄門を丸く拡げたり、玄室内部を拡げたり、或は隣りの穴と連絡口をうがつもの、或は一尺四方位の炉形を切り凹めたものもみえる。

次に第２０号横穴の実測図を示し、少しその詳細な実査要点を述べる。

他の例も同様だが羨道は無い。崖面を高さ１０１ｃｍ、巾１０２ｃｍ～３０ｃｍの広さに岩表面から２３ｃｍ程、岩をけずり凹めて、垂直壁面を作り出し、その中央部に高さ１ｍ、巾８０ cm 程の大きさに上部をアーチ形にした玄門を彫り込んである。その厚さ凡そ２５ｃｍ位。前壁上隅左右は丸味をおびているが、その隅は特に１０ｃｍ位角形に凹んでいる。埋葬当時、此の所に厚い板か岩かの扉のようなものを、はめ込んで玄室を閉塞したらしく思われる形である。穴によっては玄門下底部は４～５ｃｍ高く上っているものがある。

この狭い玄門の奥に玄室が彫り込んである。平面形は入口の方が少し狭く、奥壁の方が広い長方形で、隅は丸味をおびている。玄門に近い左右壁は特に丸味が強い。寸法は中央部長軸で、玄門内側から奥壁まで１ｍ５０ｃｍ。

左右の広さは入口に近い所で１ｍ２０ｃｍ、中央部（奥壁から１ｍの所）で１ｍ７０ｃｍ。奥壁の部分少し狭って１ｍ６０ｃｍである。高さは長軸にそって、奥壁と判然境する地点（奥壁から５０ｃｍ）の高さ１ｍ５０ｃｍ。此から奥壁は手前に傾斜して弧を描き中央より少し下の部分で１度強く凹められて床面に至っている。１ｍ５０ｃｍを最高点として天井部はゆるく曲り次第に曲りを強めて玄門内側に接続している。左右壁は断面アーチ

状で天井部に接続する。中段から下へ凹み、上は狭まり断面△形をなしている。奥壁も同様、床面から７０ｃｍ位の間が特に凹んでいる。床面は中央部が低く、左、右、奥壁に近い方へ上っている。

別に棺座も溝も認められなかった。特に本横穴で注意すべき点は、（１）奥壁から３５ｃｍ前方の床面に７０ｃｍ四方の穴が深く真直に据抜いてある点で、近所の人は深さは４尺位あると云っている。（後人の加工か）。（２）壁面に凹穴がある。左右壁に対称的に穿たれた凹みが２組ある。１つは奥壁から１ｍの部分で高さ床面から１ｍの位置に一対。他は奥壁から１ｍ６０ｃｍの所で高さ１ｍ１７ｃｍの位置にある。深さは４～５ｃｍ位である。

郡山エゾ穴横穴古墳実測表。本群の実測計数を末尾に示す。破損や半ば埋没するものもあるが、現況を以て計測した結果である。閉塞穴奥行は棒を刺して測る。

此外に約２０個位乞食浮浪者の宿となるために閉塞した穴があるという。今後、内部の実測により平面図断面図等の測定図を製作する必要がある。

遺物

既に古くから開口したため、内部の状況は判らない。遺骨の埋葬状態も遺物の副葬状態も全々知ることが出来ない。

しかし、副葬品かどうかは判らないが、前面の畑地から２、３の遺物が発見されているので記すことにする。曲玉は計３個。いずれもメノウ製茶褐色の品である。所有者は穴前の半田伝之助氏及び白石市字外北小路水野忠一氏、山田徳一氏、日下氏である。銅環１個、片倉が畑地から採取したが青銅製小型、腐蝕甚しく、金銀等鍍金の有無もわからない品であった。祝部土器片１個。鼠色薄手の品、盌形らしく直径１４ｃｍ位と推計される。横に二段位稜線帯を見る。

第２群　寺入西横穴古墳群

エゾ穴より凡そ１００ｍ東方、吉野喜平宅母家の後方、山地竹藪中に１０ｍ程の間に４個を数える。土質は凝灰岩である。４個共玄門は土砂に埋没して、入口上部だけが、わずかに判明するもの。第３号墳は内部に入ることが出来た。略測、図のようである。第４号墳も、ほぼ同様である。

第３号墳。入口玄門高さ１ｍ１８ｃｍ、巾１ｍ２４ｃｍ、玄室平面で奥行長さ２ｍ５０、巾１ｍ１８、高１ｍ３１。平面形は長方形で、ふくらみも少ない。棺座の構築は認められない。断面形も左右壁共高さ１ｍ位までは、ほぼ垂直に近い壁面で、それより上部が半円形をなしている。奥壁と左右壁の角は稜線が判然としている。天井部は奥から１ｍ５０ｃｍ辺が最高である。全体に角張った感がある。左右壁に一対の凹みがある。奥から１ｍ５０の位置で、高さ４５ｃｍの所に巾５ｃｍ、深さ２ｃｍ程の凹みが左右対称してある。この辺り天井部分が最も高い。

第３群　寺入東横穴古墳群

第２群の山続きに東方へ約５０ｍ程、高さ２０ｍ程、稜線を中程まで登った所、稜線より東側の斜面にある。その南方は吉野氏宅東方の石切場の縁端に接して絶壁をなしている。横穴群は絶壁から２ｍ程の所にある。東南に面する山腹の傾斜面に三段位に２ｍ前後の間

で開口している。現在１８個を数えることができるが、開口部は土砂に埋没して内部を見ることは困難である。計測は玄門頂部が判然としているので、高さはそれを基準に現在開口部の高さ及び横巾を計り、奥行は計測棒を刺して止る所迄とした。

第４群　金倉入横穴古墳群

もと一ツ穴と称した古墳群。郡山金倉部落の東方山中金山一番にある。郡山城址北側の沢にそって上ると、沢は二てに分れるが、南側の沢を少し上った所、北岸に凝灰岩の山肌が露出している。沢から３～４ｍ上に一列に開口している。第８号墳は、一ツ穴と称し古くは只一個知られていて、内部奥壁に山神幣束を彫刻してあった。其後、土砂崩れのため下段に在った他の９つが開口した。現在これらは埋没している。近年、この絶壁上部山頂から白岩を伐り出しているため、次第に埋没するか或は破壊されるおそれがある。

備考

番号は左から付けた。高さは横巾共開口部現在高さである。従て入口上部からの開きを示すことになる。奥行は計測棒を刺して止った所までを測った数字である。第８号古墳は全体が判るので、実測図を掲げた。外部、露岩の自然面を高さ１ｍ４０ｃｍ、左右巾１ｍ５０ｃｍ程の広さを凡そ２５ｃｍ位平らに彫り凹めた壁の中央部に高さ１ｍ３０ｃｍ、左右７０ｃｍの玄門を彫込んだ。玄門の厚さ凡そ３０ｃｍ。その奥に玄室を造った。玄室の奥行は玄門の内側から１ｍ７０ｃｍ。平面形奥壁底部の巾１ｍ３０ｃｍ。それから左右に曲線をえがいて広まり、最も広い部分は奥壁から１ｍ前方で１ｍ９０ｃｍ。次第にすぼんで玄門から３０ｃｍの所で左右巾１ｍ５０ｃｍとなり、玄門に続く。

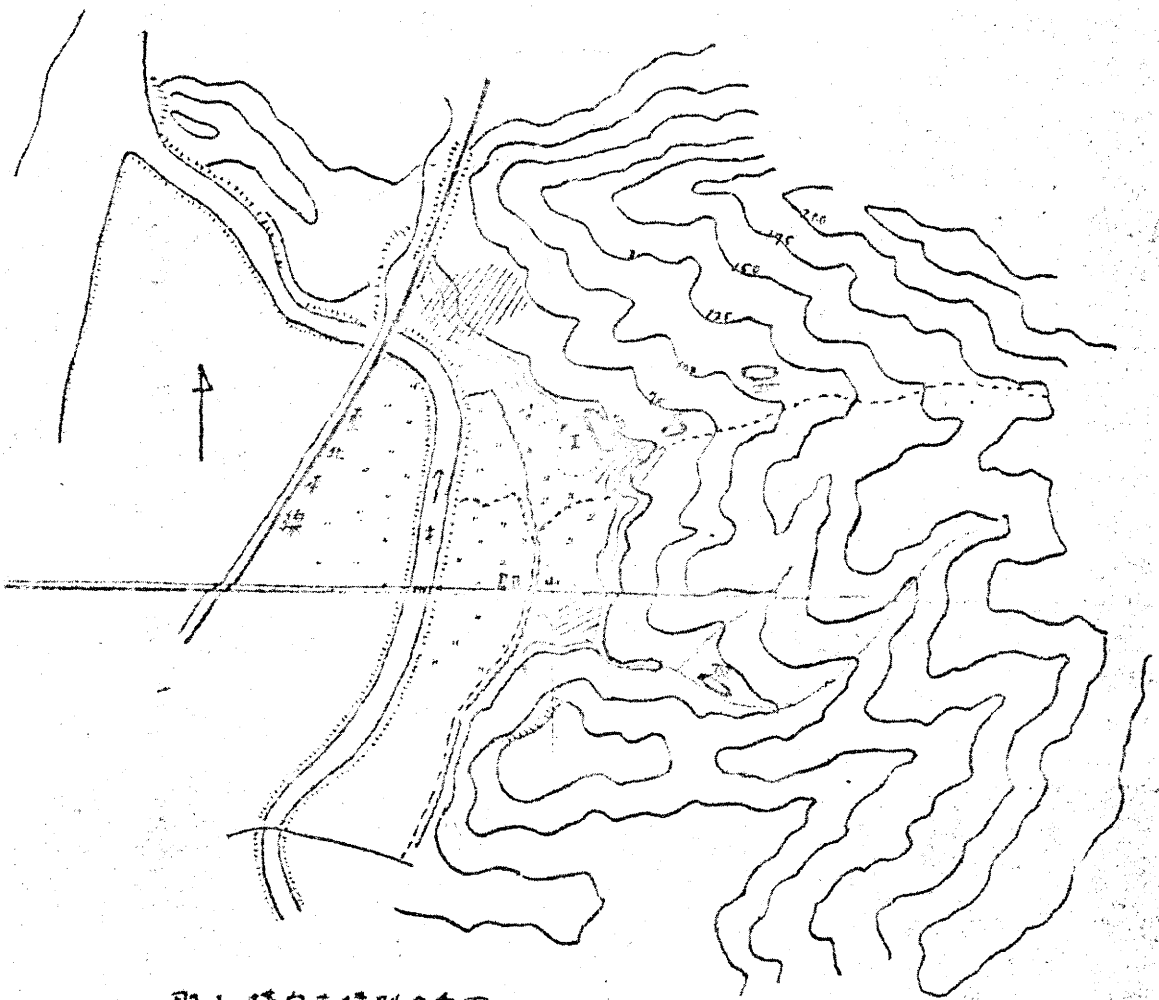
高さは、玄門内側から曲線をえがいて少しづつ高まり、最高部は奥壁から１ｍ５０ｃｍの所で高さ１ｍ７０ｃｍ。それから次第に急カーブをもって下り、奥壁をなして底面に接する。奥壁に判然とした稜線は無い。

平面形は中のふくらんだ隅の丸い長方形、全体的に丸い感じである。底部と奥壁左右壁の境が少しはっきり区切りが付き、そのまま次第に曲線をえがいて天井のドームを形成している。左右壁は中程から少し上の部分で少しくびれ、中央部横断面は△形をなしている。床面中央部少し低く、左右奥壁端が少し高い。底部に溝は無い。棺座の構造も認められない。左右壁に対称的に径１０ｃｍ程で深さ３～４ｃｍ位の凹みが一対ある。位置は奥壁から１ｍ５０ｃｍの所で底部から１ｍ３０ｃｍ上った左右壁面である。

横穴古墳群は、古墳時代末期の埋葬様式による墳墓である。宮城県では７世紀末から８世紀頃まで横穴の造営が行われていると称されているが、郡山地区の以上４群は各々に前後の時代差はあろうが右に準ずるものであると考えられる。特にエゾ穴古墳群のように６０余個が群集をして、１ヶ所にあるのは宮城県内にもあまり類を見ない。埼玉県吉見百穴を思わせるものがあり偉観を呈している。

後記。本概報執筆に際し、前記諸報告書を参照したが、特に佐藤庄吉、高子直衛、遠藤忠雄３氏の調査報告書による所が多い。種々教示された地元の諸氏、東北大学伊東信雄教授より種々御指導を賜った。共に厚く感謝の意を表する次第である。

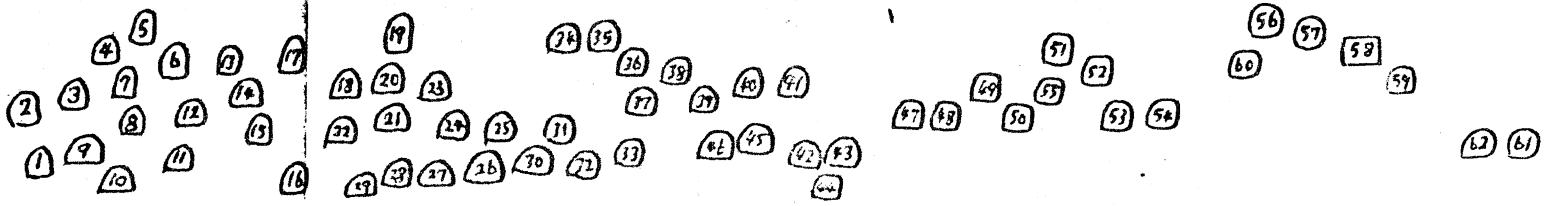
（１９６４、８、２５）　　片倉信光　記

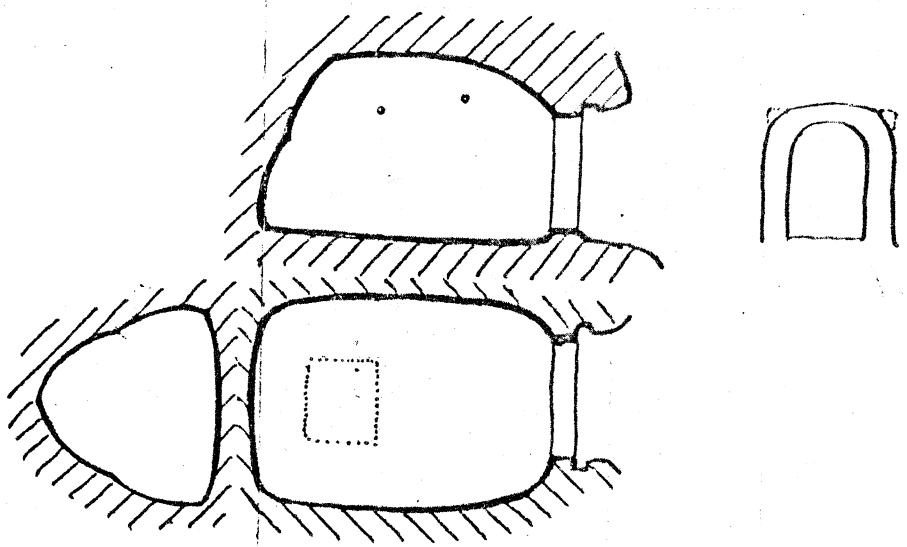


郡山横穴古墳群分布図

Ⅰ エゲガ　Ⅱ 寺入西　Ⅲ 寺入東　Ⅳ 宮前入

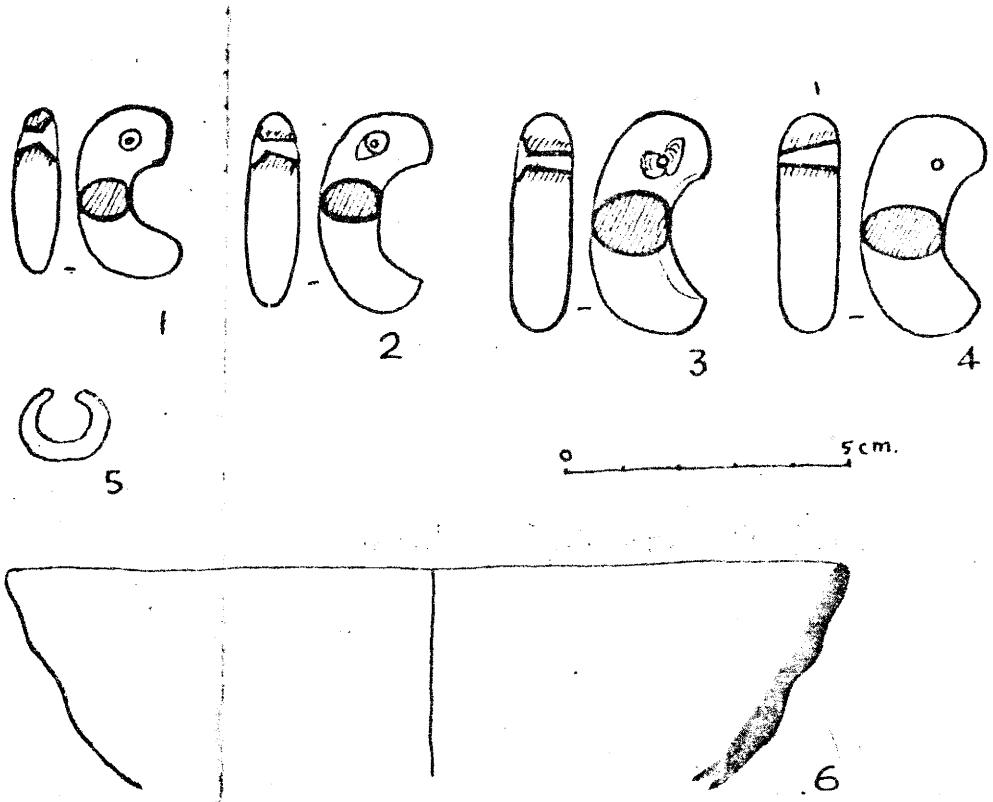
郡山エゾ穴横穴古墳群略図





エゾ穴第20号墳

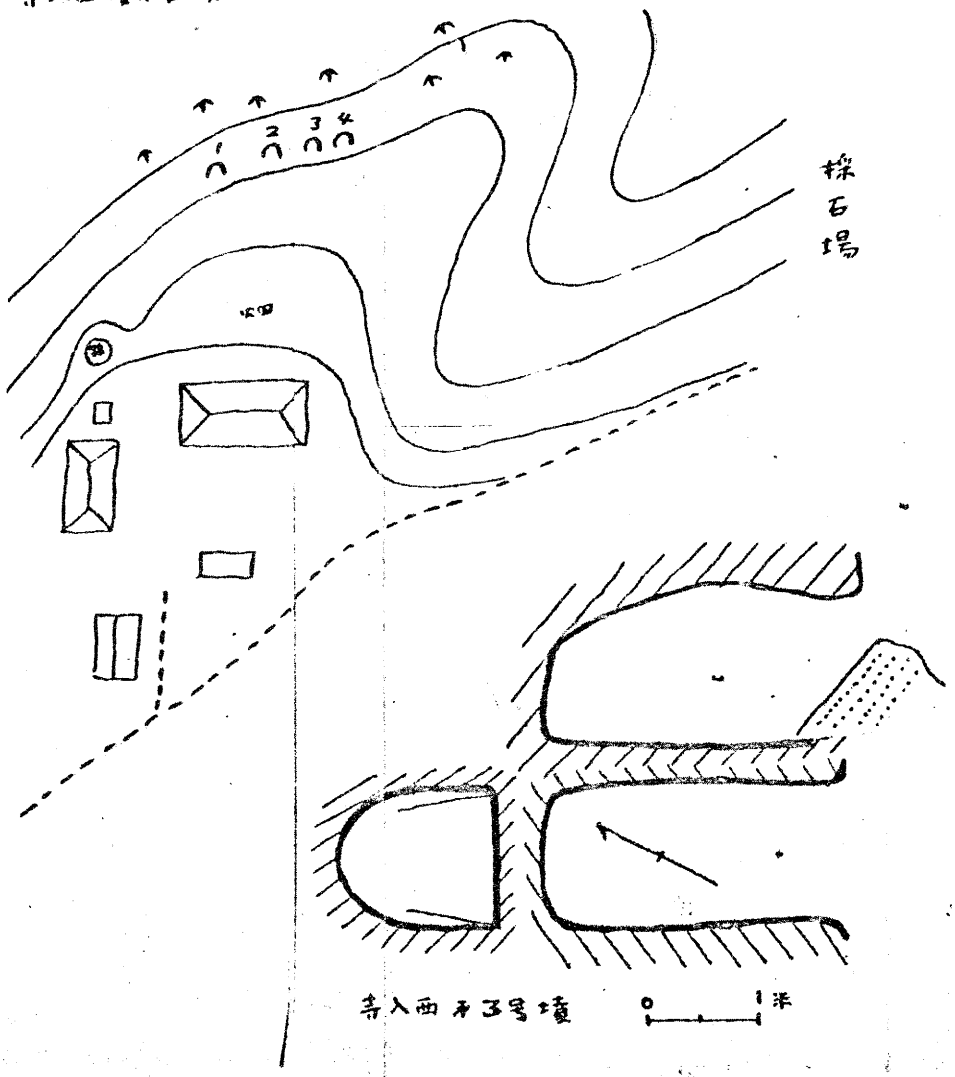
0 ―― 1米

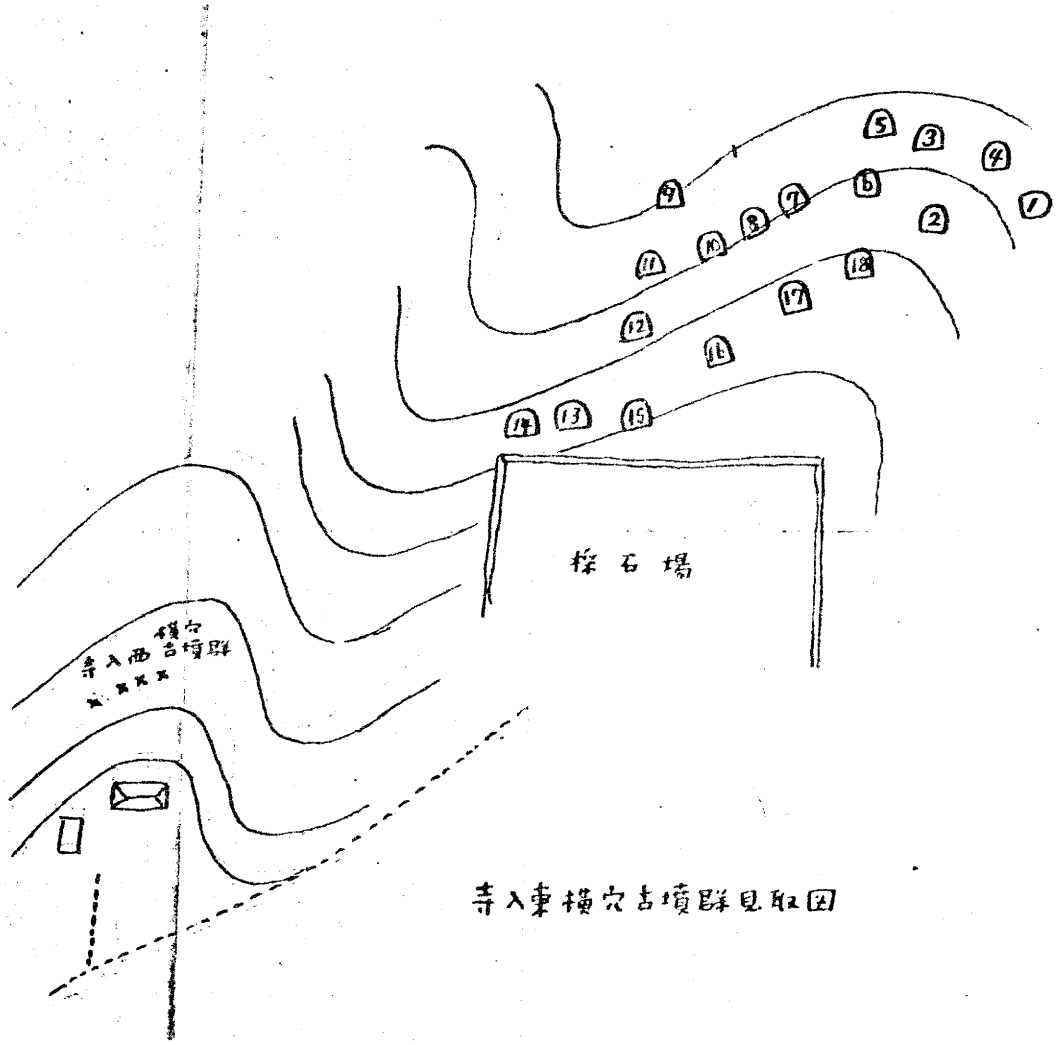


ユゾウ前畑出土　1－4 勾玉　5 銅環　6 祝部土器片

所蔵者　1 水野忠一氏　2 山田徳一氏　3 日下氏　4 羊田伝助氏

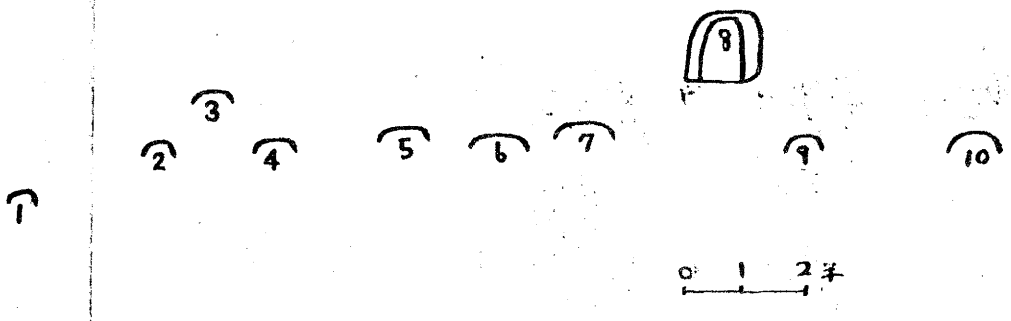
寺入西横穴古墳群略図

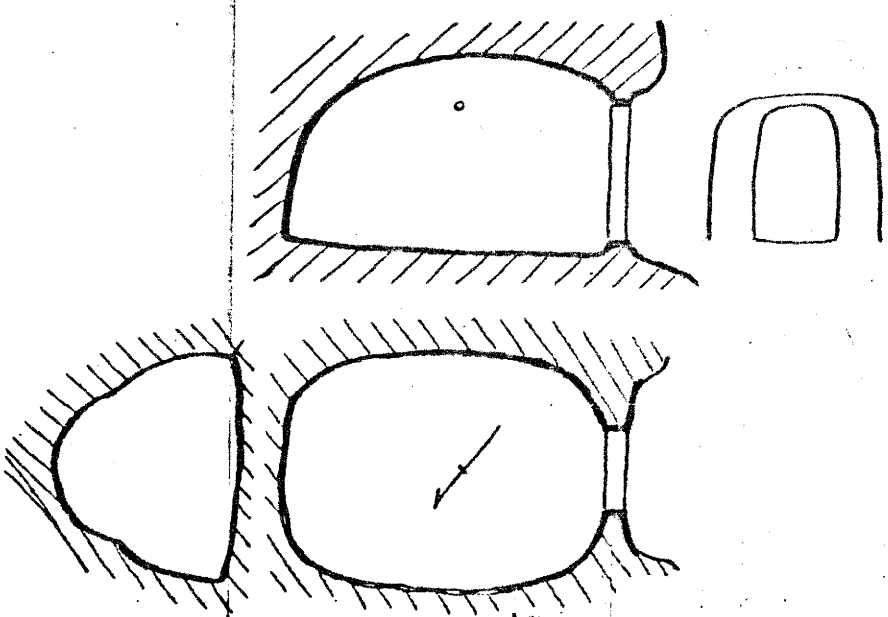




寺入東横穴古墳群見取図

金倉横穴古墳群





金倉横穴第8号

郡山エゾ穴古墳実測表

横穴番号	高さ(m)	横巾(m)	奥行(m)	備考
第1号	0.80	2.00		破損
第2号	0.67	1.55		破損
第3号	0.80	1.67		破損
第4号	1.13	口径 1.10	4.10	他穴貫通
第5号	1.22	0.90	2.60	∩形
第6号	1.40	1.00	2.75	第5号に貫通
第7号	1.15	1.15	2.80	
第8号	1.00	1.18	1.50	
第9号	0.98	1.00	1.18	
第10号	1.00	2.36	1.60	破損
第11号	1.20	1.40	2.00	破損
第12号	1.15	1.50	3.00	
第13号	1.24	1.58	1.80	
第14号	0.70	0.70	1.10	
第15号	1.30	1.70	2.20	
第16号	1.12	1.08	1.55	
第17号	0.45	0.80	3.00	
第18号	1.18	1.20	2.90	
第19号	0.80	1.14	2.50	
第20号	1.13	1.10	2.50	
第21号	内高 0.35	1.15	2.08	
第22号	1.30	1.90	2.34	
第23号	1.28	1.23	1.60	
第24号	1.00	1.20	1.90	
第25号	1.06	1.17	1.90	⌓形
第26号	1.08	1.35	1.88	
第27号	1.50	1.65	1.60	
第28号	0.90	1.10		
第29号	1.06	1.30	2.10	
第30号	0.90	1.00	2.70	
第31号	1.00	1.47	1.80	
第32号	0.30	0.88	0.62	
第33号	0.70	0.86	1.00	
第34号	0.35	1.00	1.70	
第35号	1.16	1.26	2.65	
第36号	0.40	1.00	2.40	
第37号	0.45	0.75	0.90	
第38号			1.80	口に土砂閉塞
第39号	1.03	1.20	2.30	
第40号	0.40	1.15	1.90	
第41号	1.05	0.90	2.06	
第42号	0.90	0.88	1.58	
第43号	1.00	0.87	2.43	
第44号	0.93	0.94	1.75	
第45号	0.15	0.60	0.85	土砂閉塞
第46号	0.95	0.98	1.80	土砂閉塞
第47号	0.38	1.05	2.40	土砂閉塞
第48号	1.00	0.90	2.00	扉付形跡
第49号	0.84	0.87	1.75	扉付形跡
第50号	1.00	1.40	2.30	扉付形跡
第51号	0.78	0.80	1.85	扉付形跡
第52号	0.82	0.90	1.94	扉付形跡
第53号	1.10	1.20	2.20	
第54号	1.05	1.30	2.40	第55号に貫通
第55号	0.65	1.00	2.00	第54号に貫通
第56号	1.17	1.15	2.30	扉付形跡
第57号	0.80	1.30	1.75	変造倉に利用中
第58号	5.00	5.00	2.00	
第59号	0.93	1.30	1.65	
第60号	0.87	1.26	1.70	
第61号	0.44	0.52	2.00	
第62号	0.60	1.25	1.52	

寺入西横穴古墳群実測表

横穴番号	開口部高(m)	開口部横巾(m)	奥行(m)	備考
第1号				土砂閉塞
第2号	1.18	1.24	2.50	土砂閉塞
第3号				土砂閉塞
第4号				土砂閉塞

寺入東横穴古墳群実測表

横穴番号	開口部高(m)	開口部横巾(m)	奥行(m)	備考
第1号	0.10	0.20	2.00	土砂閉塞
第2号	0.05	0.20	2.00	土砂閉塞
第3号	0.20	0.90	2.20	土砂閉塞
第4号	0.15	1.60	3.15	土砂閉塞
第5号	0.40	1.23	2.37	土砂閉塞
第6号	0.17	0.60	1.40	土砂閉塞
第7号	0.48	1.23	2.50	土砂閉塞
第8号	0.10	1.10	2.48	土砂閉塞
第9号	0.05	1.00	3.00	土砂閉塞
第10号	0.10	0.90	2.50	土砂閉塞
第11号	0.15	1.10	2.40	土砂閉塞
第12号	0.39	1.15	2.57	土砂閉塞
第13号	0.10	1.00	2.50	土砂閉塞
第14号	0.05	0.70	1.80	土砂閉塞
第15号	0.25	1.23	2.35	土砂閉塞
第16号	0.37	1.02	2.10	土砂閉塞
第17号	0.47	1.10	1.90	土砂閉塞
第18号	0.55	1.25	2.50	土砂閉塞

金倉入横穴古墳群実測表

横穴番号	高(開口部現在高)(m)	横巾(左に同じ)(m)	奥行(m)	備考
第1号	0.15	1.00	2.15	
第2号	0.25	0.90	1.68	
第3号	0.30	1.17	2.16	
第4号	0.25	1.00	1.80	
第5号	0.75	1.05	2.30	
第6号	0.80	1.25	2.00	
第7号	0.55	1.20	2.00	土砂閉塞
第8号	1.40	0.80	2.56	図面参照
第9号	0.90	0.10	1.45	土砂閉塞
第10号	0.34	1.00	1.65	土砂閉塞

凡　　例

- 本書は故片倉信光著『郡山横穴古墳群調査概報』（昭和39年発行、孔版）をワープロ入力したものである。改製にあたり、片倉家第１６代当主、重信氏の了解を得た。
- 改製にあたり、原本の所在が不明であったため、故中橋彰吾白石市文化財保護委員長が所蔵していたコピーを底本とした。そのコピーの段階において、既に誤字脱字の訂正がなされており、今回、その訂正を反映させた。
- 原本は右綴縦書きであったが、今回、左綴横書きに改めた。表も同様である。
- 漢数字は算用数字、略字は本字に改めた。
- 意味が通りにくい箇所には、句読点や文字を補った。
- 原本中で「左に示す」というような表記は、体裁を改めたため、適宜、直した。
- 図は75％に縮小して掲載した。
- 表のタイトルは、新たに付した。寺入西横穴古墳群実測表は本文の記載から新たに作成した。新たに頁数を付した。
- 図と表は後半にまとめた。
- 校訂改製は生涯学習課日下和寿学芸員が行った。

白石市文化財調査報告書　第３６集

郡山横穴古墳群調査概報

平成２１年８月21日印刷

平成２１年８月25日発行

著者　片倉信光

印刷・発行　白石市教育委員会

〒989-0206　宮城県白石市字寺屋敷前25番６

電話：0224(22)1343、0224(26)2453